

平家女護島

近松門左衛門作

序 節の中の鸚鵡檻に随つて伏仰ぎ。窓を窺つて脚踏す。紺の足丹き。紫緑の衣翠き袴。金精の妙質火徳の明輝辯才聰明にして。能く物言ふ靈鳥いかなぞ時のさかしきに逢へる。放たれたる臣。捨てられたる妻。思ひを爰に同じうす。平の朝臣清盛入道相國の。四海に覆ふ驕慢のオシシ。網には洩る。かたもなし。地家に諍ふ子なければ家正しからずとかや。小松の内府所勞によつて致仕し給ひ。教訓も懈れば驕奢暴虐心の儘。第九の姫君は高倉の帝の中宮にて。殊に此の頃御懐胎の御悦び。執柄華族の公卿も平家に詔ふ御進物。或は馬太刀巻絹織物。綺羅みち／＼殿中花の如く。門前に市をなし。萬寶一つとして闕けざれば。禁中も仙洞も。フシには。過ぎじと見えにける。

地 爰に子息三位の中將重衡。南都の軍に勝利を得。奈良の都の八重櫻今日九重の梅が香と。鎧の袖に勝色見せ御前に畏り。去る二十八日。輾磔般若坂の柵逆茂木押破り。興福寺東大寺諸伽藍残らず放火せしめ。奈良法師の首七百餘。猿澤の池に切りかけ。大將分の首五十餘級。並に大佛の頭焼落しを。衆徒の首と共に車に積んで凱陣仕る。外に生捕一人。急ぎ實檢あつて生捕の罪。御沙汰あるべうもやとぞ述べる。入道相國笑つばに入り。悪法師ども源氏に心を寄せ。當家に敵對我が威光に恐れぬは。佛を甲に着る故。悪徒の張本大佛の首をも取つたるとは手柄々々。扱又源氏肩入れの大悪僧。文覺法師南都に隠れ住むと聞きしが。生捕とは文覺かそれへ引くと宜へば。重衡

しきつて行袋より。白骨一つ取出し。是は源氏の大將故左馬頭義朝が髑髏。かの文覺東大寺の二階樓に壇を構へ。源の義朝公と書き記し本尊に立て。平家調伏の行法粉れなき所。四方を包んで攻めすくめ候へども。たゞ者ならぬ文覺太刀刀燃ゆる火も事とせず。焰を滑つて落失せ残せし所の髑髏。奪取り候と聞くよりつつ立ち齒がみをなし。エ、憎やく。此の禪門を滅さんとせし義朝。白骨となつても再び足下に来る。地入道が威勢思ひ知れと髑髏も碎け槍屑も。折るゝばかりに丁々々と打つては小躍し。はたと蹴散らしがはと踏み。一門の人々は見よ。二度の朝敵討つたりと。殿中響く高笑ひ。フシ念より猶凄じし。扱生捕とは何者面を見んと御錠の中。繩目血ばしる弱腕指まで同じ紅鹿子も。奥様じみて面やつれ三十ばかりの亂し髪。盛り過ぎたる天桃の春を傷める姿にて。引かれ出でたる百の媚列座の一門目を動かし。烏帽子ひらく

ひらめけば人道も氣を取られ。おく齒向ふ
齒まばらの大口くわつと開け。フシとろく
見とれおはします。地 重衛進み出で。此
の女は鬼界が島の流人。俊寛僧都が妻あづ
まやと申す者。南都法華寺の尼寺に隠れ住
み。平家に敵對小長刀を以て某が陣を窺ひ
しを。搦取り候と披露も聞かずム、色よ
き花は匂ひも深し。みめがよければ心もや
さしく健氣なり。俊寛法師は尊けもなき妻
帶坊主なれども。二萬石の寺領を與へ僧都
になして崇敬せし。詞 清盛が恩を忘れ。法
皇の謀叛に與したる罪科。詞 女房に科はな
し。それ故に當家を一旦の恨みは殊勝々々。
地向後我に宮仕へよ。年寄りし禪門が起臥
の撫擦り。介抱に預らんそれ繩解けと宣へ
ば。地 瀬尾太郎兼康。繩を解かんと取りつ
く腕もとすと立つてはたと踏み。慮外な
り青侍。院の昇殿を許りし法勝寺の執行俊
寛僧都が妻。地 軍の慣ひ雜兵にも搦めらる
るは是非らなし。我が夫と膝を組みし平家

の前。引かるゝさへ口借しきに。此のあづ
まやが身に汝等が手を觸れさせうが。羽あ
らば空をも飛び夫諸共と思ふ身を。命助か
り宮仕へとは情知らぬ清盛公。エ、昔の世
が世ならば斯る無念は聞くまいもの。神佛
の罰利生も人によるか入道殿と。スエテはつ
たと睨む目に涙。フシ包みかねてぞ見えにけ
る。詞 いや入道を情知らぬとは料簡違ひ。
此の體我朝が妻。常誓が我にあまえる不
便さ。牛若なんといふ子供を助け置きしは
何と。俊寛を島より戻さうと戻すまいとお
事が心にあるべき事。地 それ局々の女ども。
あづまやが繩を解き西の對にて随分勞り馳
走して。酒宴音樂舞ひ踊り。望むことして
慰めよ禪門が秘藏の客人。もてなせくと
宣へば。上中藤の女房達手々に繩も打解く
る。人々の執成しにて夫俊寛の若しや歸
洛の種もやと。心にそまぬ輕薄のフシ空頼
めこそ理なけれ。地 ヲ、梅櫻にも勝つて散
ること知らぬ人道が閨の花。老後の眺め尋

命の樂。皆重衛が忠孝手柄々々。詞 奈良法
師の首に此の體を添へ。大佛の頭をも六
條河原に獄門にかけ。地 難波瀬尾誓固して
見物の群衆の聞く前。首帳を讀み立て諸國
にかむ源氏ども。開傳へにも威をくれ平
家の威勢を顯せ。若し奪はんと近付くか。
胡散な奴ばら切棄てにせよ。やつと長絹の
そば引抓み。帳臺に入り給ふ六十有餘の老
木櫻。我慢の色に咲き出づる心の。花や三
春の水。フシ六條河原に。地 高垣結ひ慮
遮那佛の御首に。義朝の體を並べ中央に
掛ければ。照日の影も金色に五十餘級の
衆徒の首。光明に照されて累々と連なりし
は。梢に實のる佛前の。フシ 按渡羅菓とも謂
つべく。地 洛中の貴賤腫を接ぎ。近國他國
の老若男女道去りあへず立集ひ。五天竺の
堂塔を一日に滅却し。八萬四千の僧尼を殺
せし弗沙彌多羅が惡逆を。末世の今に見る
事よ。奈落の底には刹利も首陀もかはらぬ
もの。怖や淺やの聲々は巷に充ちて。フシ 夥

し。地瀬尾の太郎兼康入道相國の仰せによつて、首帳開きスエテ高々とこそ、讀上げけれ。第一の物始坂の四郎法師永覺。山科寺の大倉坊鐵拳の式部卿。是等は六宗に名を得し惡僧。軍神の祭とす。コハリ戒壇院の宮様那沙彌。詞戰惡口に寄手も口を喰ひしばる。西大寺の苦口法眼反魂坊。二月堂の荒若狹吉祥院の婆羅門佐渡。南大門の貫の木日向釘ぬき周防。南閻堂には八角口玉の眼光法師。傳法院の今章駄天今毘沙門。鉾を取つてはならび名取りの。法師武者俱舍唯識維摩の學頭にて。智惠殊に勝れば。今文殊ともシ字せり。鎮守堂の鰐口因幡猪和泉コハリ虎禪師。是等は早業隼の飛鳥の影に先だつて。風を追つかけ嵐を追つめ橋割り。石割り。岩切坊ナホス。發志院には蜻蛉返りの通明法師。矢くりの小聖。コハリ夜叉新發意。榎木寺に鉦僧正元興寺に鎌僧郡。管籥中將熊手快源黒不動赤不動。十五大寺七大寺の荒法師惡法師。野晒の首は源

の義朝。金色の大頭は聖武天皇の御建立。逆徒の大將金剛の盧遮那佛。前佛去つて後佛を待つ首數都合五十六級。七千萬歲彌勒の世迄治る平家の御代の大數かなひ畢んぬ。從三位右近衛のナホス中將平の朝臣重衡。是を討つとぞ讀みたりける。地往來群集日をそばめ。恐ろしや勿體なやと皆手を合する折から。六波羅の早使。下司の次郎友方。鞭鎧を合せ駈來り。難波瀬尾に述べけるは。常磐御前より義朝の觸體を申し請け。持佛堂に安置して經讀み回向し申ひたきとの願ひ。叶へられては又新夢の俊寛が妻。あつまやが何事かを望まんに。叶へられずばかたみ恨み。地所詮此の觸體事やかまし。打碎き加茂川へ流し捨てよと御一門一統の仰。いで計ひ申さんと脚榻を踏んでのび上れば。あら不思議や大佛の鼻より。大手を以て下司が頭をむんずと掴み御首の中に聲あつて。義朝が觸體よりおのれが素頭はり碎かんと。握り固めしかな拳鉢も割

れよと三三三。腦も鳥帽子も打裂かれ眼も眩みこれ死にますく。お助けとほゆるも構はず前へかつばと突伏せ。其の手をのばし觸體つかんで御首へ引入れしは。再び爰に羅生門。茨木童子が腕骨にて。相手が綱には似ざりけり。地難波瀬尾肝を消し。今度の兵火に燒落ちし此の中に。狸野干も栖むべき様なし。黄金の交りし金佛。金の精と覺えたり。地序に御首も打ちひしぎ。鑄潰して公用に達せんそれくと。荒子中間立ちかゝり。大槌大杵鐵捲などごうくくわんく。百千の銅鑼釣鐘。河瀬にひき連立ち木草も揺ぐばかりなるに。裳なし衣に種子袈裟かけ。六尺ゆたかの大坊主御首の中より踊出で。詞杖も杵も踏散らし蹴散らし。ヤアやかましいうんさいども。昔にも聞くらん高雉の文聲といふ源氏の腰押。此の觸體はちと我が物。取返さうばかり佛の頭踏みあらした。地間は平家利生は源氏。清盛にまつかう。フシ叶かせと立ち

出づる。それ盗人坊主難波瀬尾を知らぬか。
一足も過ぎじと大勢どつと取り巻いたり。

「やれことごとくし。那智の滝に千日うたれ。
龍神と相撲取り。愛宕高雄の犬天狗と腕押

ししたる坊主。地手並を見よと獄門柱忍い
と引抜き振廻し。河原の院の古道より。長

講堂の裏筋を追かけ。追込みなぐり立つれ
ば眉間眞甲。腰骨膝骨打ちみしがれ。あ

たりに近付く難兵なし。調ヤア口程もなき
難波瀬尾。頭はられて堪忍するか。地下司

の次郎下り合へ出合へと馬の尾にて柄まい
たる九寸五分。よらば突かんず面魂。フシ恐

れて寄付く者もなし。ヲ、さもあらん。
調うぬらが主の清盛は國土を惱ます大惡魔。

此の文覺は惡魔降伏。國土安穩を祈る。大
行者を苦しむる惡逆。地遠くは三年近くは

三月に思ひ知らせん。此の身は則ち不動明
王。南談三曼多轉日羅根。戰擊摩路路瀝

擊薩破吽也吽怛羅ナホスあんだらどもと。ど
つと笑うて立歸る。勇猛カゾ。春風も。

庭は踊の。秋の露さつさふれく。ふるや
小袂はいとしる。忍いく忍いく縁に引

かゝる柳の糸の。雪に折れぬも風には靡く。
竹は戀しり幾夜も靡く。なびきくるく栗

下野の萩野分の薄。尾花靡きてやつちりナ。
くくナ。ちりり縮み髪も油とろく。櫛の齒

に靡く。歌たんく丹波の酒香童子もサア
エさずぞ盃飲めさ酔ふさ。酔うたまぎれに

な君と寝てさ。オタリ歌ひ。踊つて上藤達。
地局の椽に腰打かけ。申しあづまや様は見

さしやんせ。時ならぬ踊も御奉公。入道
様の仰せ随分お心慰め。お盃の相手。お寝

間の添寝も遊ばす様に致せとて。あれ彼の
亭に御座なさる。拙いざ氣をうかして我

我が。踊りにつれ御前へお出で。サア踊
りとさほめけば。調ア、いやく。自らを

いさめの踊り笑ふではなけれども。世にあ
りし昔は妓踊子勉まじり。様乃のかはり踊。

や。子踊木曾踊小町踊伊勢踊。地見せたい
物は都踊のぬき拍子。調ム、見たいくい

ざ一をどり所望々々と浮かされて。フシ恥
かしながら。地斯うした振りに若衆出立の

目狹笠。金罽。門指で。歌たんだふれ
く千代の松坂越えてエ。松は千歳の

色ながら。地惜しや小松は。雪折れて老木
かれせぬ六波羅踊が所望だが合點か。歌平

家々々と千草も靡く。扱は居よいか住みよ
いか。居よも住みよも慈悲も情もしやん

としよ。地ナホス我は身一つ。泣き暮らす。
歌踊りとが見たくば。昔に返せ世の中對の

浴衣しやんと着た踊りふりがゆかしい。吉
野初瀬の花よりも。紅葉よりも。戀しき夫

が地見たいもの。うたての踊やな。情には
人々鬼界が島へ流され。夫諸共住む様に。

申してたべとばかりにてステエつかつばと伏し
て。泣き給へば。地踊子の上藤達。地に理

痛はしとフシ。皆々袖をぞ絞らる。地踊の
聲の間えてや亭の内より越中の次郎兵衛盛

次。御使として局に入り。調なうあづまや
殿。此の間御一門衆入替り立ちかはり。様

様仰せらるゝに承引なきも尤ながら、御身
とて岩木ならず。今日本にて西を東と宣ひ
ても、背く者なき入道殿。戀なればこそ我
我迄御頼み。時世に付くも一つの道且つは
身の果報。常磐御前の仕合せ是ぞよい證據。

女たる身の望む所と思はずか。地サアく
よい御返事とすり寄れば身をささり。詞

エ、主人達から内業迄人らしい人はない。
常磐御前の仕合せとは武士の口から聞きに

くい。夫義朝の白骨迄踏みたゞく敵の。手
かけ妾となる様なすけべいの淫奔者と。此

のあづまや較べらるゝも口惜しや。地八重
の沙路の鬼界が島。雨露も凄きかね俄鬼同

然になりはてし。殿御を愛しや戀しや。逢
ひたやと思ふより外望みはない。身の果報

何にせう。何も聞かぬ聞きともないと。兩
手にて耳ふさぎ。武士の情にはせめて泣か

せてくれるなど。わつとばかりに俯伏して
沈み入りたる有様に。盛次も詞なく、フシす

こゝ奥へ入りければ。地ひつ續いて齋藤

別當實盛。白髪髭喰ひそらし。我等六十

に餘り色氣をはなれ。奥方女中を預る實盛
といふ者。お寝間の勤は兎も角も。御前へ

ちよつと出る分は年寄の悪い事申すまじ
と。いひも切らせずア、くどやくどや。昨

日も来て同じ事くどくどと長口上。地聞き
入る耳がないと愛想なければ手持わるく。

拙者生國越前近年御領に付けられ。武藏
の長井にありし故。地それで長居は御免あ

れと、フシ紛らしてこそ入りけれ。地胸に
せまれば聲に出で。恨めしの世の中や。因

人となる程ならば檣械牢獄屋にも入れら
れず。情まじりの憂目を見る水責火責の苦

みも。心のつらさは劣るまい。此の上にお
使立たばステ何と返事も詮方なし。地なう

上臈達。我が内には有王丸とて音に聞えし
大力の若者あり。若し忍んで尋ね来るなら

ば今生後生のお情。ひそかにそつと知らせ
てたべ。地有王を力に此の地獄が通れたい。

有王がな來れかし有王は來ぬ事かと。立ち

てはくどき居ては歎きの折から。渡殿に足

音して能登守教經。童の菊王相具しつと
入り。地俊寛が妻あづまやとは汝よな。某

などは朝敵退治の大將か。其の外天下の大
事ならで斯様の大人氣なき小節に。詞も加

ゆる能登守にあらねども。入道殿の仰せは
某とても背かれず。先づ入道殿を誰とか思

ふ。一門の棟梁國家の固め。如何なる非道
を宣ふとて汝等風情が理を理に立てさせ。

清盛入道が理を枉けて天下の仕置き立つべ
きか。さりながらおことが女の操を守つて。

二張の弓を引くまじとは。弓取の義にも劣
らぬ魂感じ入る。地匹夫匹婦も志を奪はず

といへり。屍の上まで恥辱なき。貞女の道
は能登守が立て、取らせん。地又おことは

一旦入道殿の御詞。急度立つべき御返事。
地サア只今々々と、フシ道理正しき詞の末。

涙に、フシかきくれ。手を合せア、有難しと
も嬉しとも。申し上ぐる。フシ詞なし。地平

家の中にも小松殿か能登殿かと。二二とい

うて三のなき文武二道の御大將。數ならぬ
下司女に道を立て、取らせうとの。海山の
御恩徳夫の名をも穢さず。生れての本望死
しての譽。詞いで自らも清盛公のお詞の立
つ返事をと。地 恨の守刀するりと抜いて肝
先にぐつと突立て一抉くつ丁申し教經様。
あづまやが死ぬれば平家の御意を背く者
此の世にない。御意を背く者なければ。入
道殿のお詞は立つたぞや。お詞立つるは此
のあづまや。あづまやが道を立て、下さん
すは教經様。地 御恩は忘れぬ。ア、希いと
フシ是を最期に絶え果てたり。地 驚き騒ぐ女
房達突き退け押し退け。出かいた女と首打
落し詞これ菊王。此の體門外に捨て置けと。
地 髻揃んで首提げ。御前間近く欄干に護ん
で。御心を掛けられしあづまや。教經が
くとき落し連れ参る。御望み叶ひ候。地 愈
ぎ御酒宴〜と呼ばはり給へば。入道殿障
子も御簾も引きのけほやく笑顔。つれな
きあづまやを靡かせて来たたとや。能登守は

弓矢打物ばかりか。戀の中立ちの名將功名
功名早う迷ひたし。詞彼の君はいづくにぞ。
地 則ち是に候と袖の下より生首。御膝元に
さし置けば入道くわつと顔色かはり。詞ヤ
ア腹立ちや悴め。首斬れとは誰がいひし。
年寄つて色に耽ると嘲つたる仕かた。親同
然の伯父に向つて緩急至極。地 返答せい能
登守言譯せい教經と。日頃の短氣増長して。
掴みつかんず荒氣にもちつとも恐れず。詞
是は近頃御無理千萬。もと此の女の心だて
善悪は御存じなく。面體美しき妍き色を戀
焦がれ給ふゆゑ。その顔ばせをお手に入れ
し教經。御感はなくして御立腹はむたい千萬。
彼は法皇の御謀叛に與し當家を亡し。一門
の首取らんとせし俊寛が妻。地 折がな時が
な夫の仇と。心に劍を含んだる女。御寢間
近く寵愛は。鳩毒に砂糖甘蔓をつけて唇に
寄せ味ふ如く。命がけの戯れ大將たる身の
せざる所申すに及ばず御存じの上。詞兎角
お心掛けられしは。あづまやか目鼻口元よ

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

お心掛けられしは。あづまやか目鼻口元よ

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顔ばか
り連れて参つたり。地 サアお盃の相手それ
御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を
膝元へ。押しやればさすがの入道顔しがめ
身を締め。ハア、今日は安藝の殿島の御縁
日。精進を忘れた教經明日々々と。座を立
ち給ふを是は胸慾。あづまやが思はく餘り
不興とフシ止むる折から。地 御門はたく
締むる音遠侍騒ぎたて。詞俊寛が召使有
王丸と名乗り。十八九のあばれ者。清盛公
へ直見参と御所中を切散らし。御座危く候
と追々の言上に。地 いや〜倒願能登殿甥
御頼み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨
て奥に入り給ふ。地 荒れに荒れたる有王丸
當番の詰侍。放免の役武者所牛に蛇の付く
如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に
立つて大音上げ。詞清盛相國は主人俊寛が
妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よ
めり御寮は首ばかり。聲殿に胸が有つては
片らぐで似合はぬ女夫。入道の胸を切つて

入滅の仲人、よい所に有王丸聖殿に見参と、十八さゝぎ。力は藤こぶ藤づるの。捻合ひ
地 八方に眼を配り振散らす前髪は。時雨の
雲に風あれて、フシ暮山をめぐる勢なり。地
下司の次郎友方丁稚め遣らぬと絶り付く
を。首筋揃んでぐつと引寄せ。文藝法師が
はり和らけたる頭。手間は入らずと刀の柄
にてはつたと打てば。柘榴を割つたる如
くにて、フシ抱へてはふく逃けてけり。地
近寄つては叶はじと難波瀬尾が無分別。巻
轆轤の大綱を兩方四五間引はつて。巻いて
取らんと善いたり。詞ハア、子供遊びの綱
引きか悪あがきする俄鬼めら。地是見よと片
足上げやあうんと氣をこんで。間物をふつ
つと踏み切れば。瀬尾は武士のきづ難波。
西瓜まろばす如くにてフシころく轉びう
つたりけり。地此の上は能登鱈を一口喰ふ
まで。能登殿くんと斬入る所を。菊王丸と
んで出でどつこい慮外な能登よばり。詞且
那には手に足らぬ。童の菊王サア来いと四
つ手にむんずと取組んだる。コハリ兩方年は

十八さゝぎ。力は藤こぶ藤づるの。捻合ひ
締合ひ絡み合ふ。有王が大髻菊王が女童
亂しかけ振りかけ。下手上手に押合ひてナ
ホム。フシ勝負は互角と見えたる所に。詞ヤア
く過すな菊王。汝等が手に敵はじと取つ
て引退け。地教經が一拉と組付き給へば。
望む所と有王が腕がらみに差込んで。一押
しぐつとこりやくこりや。捻ぢ付くる
大力にさしもの能登殿よろくく。ヤ前
髪めに負けうかと踏直せばはたとつき。エ
エ口借しと取付けば振解き。組めば捻ぢま
け引廻され。平家一番の大力と昔に聞えし
能登守。大腰に地響きうたせ。フシ尻居にど
うと投憑たり。詞有王めには教經も敵は
ぬ。一人も出合ふな手並は見えた。汝も歸
れと宣へば。イヤ生きて歸る命なし。入道

犬死するかたわけ者。地誠の力は見よと片
手に揃んで。車寄せの築地越投越す力風を
持つ。桐の一片のふうはふはひらひら
りと。下り立つて。フシ恩を感じる感涙落
涙。地うはべは色だつ敵と敵。にらむも徳
に入るの門。能登守は入道を諫めて徳に入
るの門。六波羅の大手門總門樓門冠木門。
扉は金石鐵壁の隙間の風も通さねど。さは
らで通る弓矢の情助くるも道殺すも道。さ
らば歸れ有王。お暇申すと禮儀は身の上残
る恨みは主君の上。拳を握り牙を噛み。し
どろ足にて歸る波。内には義理を立波の音
に聞え名に聞きし。能登殿の弓勢勇力學ば
ずして。學問力も有王丸引かれて。名をこ
ぞ傳へけれ。

地我が門に千尋ある陸と詠ぜしも。平家に
繁る園の竹。入道相國の御娘中宮御産の當
月。御座所は六波羅の池殿にて。障ての御
祈禱御室東寺天台座主を始め。御願寺十六

第二

箇寺。伊勢住吉加茂殿鳥七十餘ヶ所の御奉幣。中にも能登守教經は石清水御代參。フ

駒を早めて下向ある。鳥羽の作り道。丹

左衛門尉基康瀬尾の太郎兼康。雑色供人相

具し旅出立にて参り合ひ。我々は中宮御

産當月様々の御願につき。今日獄屋を開き

罪科人ども残らず御免是によつて。鬼界が

島の流人をも召還へさる、赦し文の御使。

兩人承りッシ候なりとぞ申しける。能

登殿やがて下り立ち給ひ。流人御免

とは尤の善根然らば勿論俊寛僧都。丹波の

少將成經平判官康頼。三人共の御赦免であ

らうするなど宜へば。イヤ御赦し文の名付

は丹波の少將平判官一人ばかり。俊寛は殊

に御憎しみ深く。一人島に残して捨てよと

の御訛と聞きもあへず扱こそ扱こそ。是

に就けても小松殿は三世を見ぬく末代の賢

人。入道殿慈悲心なく。意地づよき氣質を

今病中にも一つの悔み。鬼界が島の流人ど

も赦免の時。俊寛は憎しみ深く一人島に

残さるゝ事ありとも。一門たつて諫め申せ。

重盛一人いふにもあらず。忝くも鳥羽の法

皇かねくの御歎き。かれこれ院宣と思ひ

一人も島に残すな。それにも入道殿承引な

くば一門の心得にて。中國備前の邊まで呼

びのほせ時節を見よ。我が死後迄も遺言

と思ひ忘るゝなど。斯くいふ教經一門残ら

ず病床に呼び集めての詞。一門は皆忘れし

か覺えても守らぬか。エ、いひがひなき

者どもかな。イヤ人はともあれ此の

教經は。小松殿の詞あだにはせじ入道殿へ

申す間。兩人暫く是に待てと馬引寄せ乘ら

んとし給へば瀬尾の太郎つつと寄り。申

し。いはれざる御取持瘦坊主一人助けし

とて。定業の御難産が變成男子の御平産も

候まじ。總じて俊寛當家御取立の身にて

思知らずの畜生。女房あづまやが御馳走答

拜受けながら。御心にも従はず慮外の自害。

第一に家來右王といふ小倅。御所に切入

を求められんは狼の子飼する同然。今をも
知らぬ大病の小松殿御詞立たぬとて。何の
咎めもなき事と。申す内より能登殿氣色損
じ。だまれ瀬尾詞多し。汝が様なる不實
者に問答無益。所詮俊寛が赦文は教經書
いて渡さん硯料紙と宜へば。イヤ申し我
等は少將平判官二人ばかり御赦しに。入道
相國公の御使外の義は存ぜず。地急ぎの公
用御暇とすんど立てば丹左衛門引止め。
これく御邊ばかりがお使か。兩人承る上
は萬端相談入懇もあるべき所。地いかめし
けに先走り獨り擡出何とする。何事も御産
安穩の爲ならずや。祈誓も立願も慈悲心な
くて叶ふべきか。別紙に俊寛の赦文持參
して。使の越度になるとも御邊に科はか
けまい。此の丹左衛門基康が腹切る迄と
申す詞に一致して。俊寛が赦し文能登守教
經と。在判して渡さるゝ丹左衛門重ねて。
赦免狀は濟み候へども海上改めの關所關
所通り切手。鬼界が島の流人只二人とばか

り書かれたり。是ぞ難儀と出せば取つて
披見あり。詞ヲ、是ぞ猶心安し。二の字の
上に能登守が一點加へて。流人三人關所異
議なく通すべき者なりと讀上げて。渡し
給へば丹左衛門請取り此の上もなき善根。
關所もやすく御産もやすく。瑞相よき
門出いざ立たれよ兼康と。いへども瀬尾し
ぶく顔。詞女童のする様に。慈悲善根な
んどで子が生るゝ程ならば。世に難産はあ
るまいが。地産の道ははなれ物此の上に中
宮の。御身に怪我のあつた時能登守教經と
申す弓取。愚痴文盲のお名が流れん笑止笑
止と。舌も引かぬに六波羅より早使。中
宮御平産皇子御誕生教文のお使。地悦んで
急がれよと呼ばるる聲に瀬尾の太郎がむつ
と顔。詞これ瀬尾女童のする様な慈悲善根
の奇特あれ聞きたるか。教經が文盲の名を
流さんかとの氣遣ひ。汝等は智恵あつて人
の上迄心遣ひ太儀々々。さりながら智恵も
除り働けば。後には其の智恵も落ち。つれ

て首も落つるもの。地用心して道急げと詞
も胸にはつしとあたる。小松殿の大悲の弓。
能登殿の義信の矢。海山越えて末遠き筑紫
の空や。三處。地もとよりも此の島は。鬼界
が島と聞くなれば。鬼ある所にて今生より
の冥途なり。假令如何なる鬼なりと。此の
哀れなどか知らざらん。此の島の鳥獸も鳴
くは我をナホス。フシ問ふやらん。地書語るも
忍ぶにも。都に似たる物としては。フシ空に
月日の影ばかり。花の木草も稀なれば。耕
し植ゑん五つの穀物もなく。地せめて命を
繋げとや。峯より硫黄の燃出づるを。釣人
の魚に換へ波の荒布や干潟の貝。地みるめ
にかゝる露の身は憔悴枯稿のつくも髪。肩
に木の葉の襤褸させてふ蟲の音も。枯木の
枝に。よろ。く。よろ。くと今は胡狄の
一足とかこちしも。俊寛が身にフシ白雪の。
地つもるを冬消ゆるを夏風の景色を曆にて。
春ぞ秋ぞと手を折れば凡日数は三年の言
問ふ物は沖津波磯山おろし濱衛。地涙を添

へて故郷へいつ廻り行く小車の。輶の耐の
水を戀ふ憂目もなかくに。くらべ苦しき
身の果の命。フシ待つ間ぞ哀れなる。地其
屋フシ同じ思ひに朽果てし鶉衣に苦深き。
岩の懸路を傳ひ下りわづらふ有様。詞我も
あの姿かや。諸阿修羅等故在大海邊。そも
三惡四趣は。深山海づらにありと御經に説
かれしが。地知らず我俄鬼道にや落ちげん
と。能くく見れば平判官康頼。ア、我々
人もかくも衰へ果てしかと。心も騒ぐ濱邊
の蘆。かき分けく来る人は丹波の少將成
經。詞なう少將殿なう康頼。地こは俊寛か
僧郎かと招き合ひ歩み寄り。伴ふ人としては
明けても康頼。詞暮れても少將。地三人の
外なき物を何とてか音づれ絶え。山田守ら
ねど世にあきし。僧郎が身こそ悲しけれと
ステテ手を取りかはし泣き給ふ。かこちは道
理。フシさりながら。地康頼は此の島に。
熊野三所を勸請し日參に暇なし。三人のと
もなひも此の頃四人になりたるを。僧都は

未だ御存じなきか。何四人になりたるとは。

荒布あられもない裸身に。詞鯉がぬらつき

身大事のせなの友達。康頼様は兄丈俊寛様

扱は又流人ばしあつての事か。イヤ左様で

鱧がこそぐる蟻蜂がつめる。餌かと思うて

はて、様と拜みたい。娘よ妹よ兎せろ角せ

はなし。少將殿こそやさしき海士の戀にむ

小鯛が乳にくひ付くやら。地腰の一重が波

ろときやつてりんによがつてくれめせかし

すほれ。地妻を儲け給ひしといふより仲郡

にひたれて肌も見えず。詞壺かと心得蛸

と。ほろと泣いたる可愛さ。都人のござん

にこくと。珍ししく。配所三年が間人

めが臍をうかがふ。地浮きぬ沈みぬ浮世渡

すより。りんによきやアつてくれめすが。

の上にも我が上にも。戀といふ字の開き始

り。人魚の泳ぐもかくやらん。汐干になれ

り感にたへ。扱々おもしろうて衰れて伊達

め笑ひ顔も是始め。詞殊更海士人の戀とは

ば洲崎の砂の腰だけ。踵には始ふみ。太腿

で殊勝でかはい、戀。先づ其の君に見参い

大織冠平も。磯にみるめの汐なれ衣。ぬ

に赤貝挟み。指で鮑起せば爪は鱧貝黄螺の

ざ庵へ参らうか。いや即ちあれ迄同道。千

れ始めは何とく。俊寛もあづまやといふ

ふた。あまの逆手を打休すみ黄楊の小櫛も

鳥々々と呼ばれてあいと蘆かき分け。竹の

女房明暮思ひ慕へば。夫婦の中も戀同然。

取る間なく。蠨蛸の尻のぐるくわけも縁

おふこにめざし籠。かたけた振りもオクリ小

地かたるも戀開くも戀。聞きたししく語り

ある目からは玉鬘。かゝる島へもいつの間

じほ。らしけな眉目がよければ身に着た

給へとせめられて。顔を赤むる丹波の少將。

に。結ぶの神の影向か。馴れ初めなじみ今

る。襪襦も綾羅錦繡を。恥ぢぬ形はあたら

三人互の身の上を包むにはあらねども。數

は埴生の夫婦住み。夫を思ふ眞實の情深く

物。フシなぜに海士とは生れけん。詞僧都も

ならぬ海士の茶船押出して。戀と申すも恥

衰れ知り。詞木の葉を集め縫綴り針手き。

會釋の挨拶。やさしい噂承つて感心。康頼

かしながら。詞なうかゝる邊國波濤迄誰が

地さよの寢覺は臨じむ肌に引寄せ。聲こそ

は疾く對面とな。俊寛は今日始め親と頼み

踏分けし戀の道。あの桐島の漁夫が娘千鳥

は薩摩訛り世にむつましい睦言。詞うらが

たいとや。此の三人は親類同然。別して今

といふ女。世の營みの汐衣。汲むも焼くも

様な女ら。歌連歌にべる都人夢にも見やし

日より親子の約束我が娘。あはれ御免蒙り

それはまだ濱邊の業。地そりや時ぞと夕波

めすまい。縁あればこそ抱いて寝てむぞう

四人つれて都入。丹波の少將成經の。北の

に可愛や女の丸裸。腰にうけ桶手には鎌。

か者ともおもしやつてたもりめすと思へば。

御方と緋の袴着るを待つばかり。エ、口惜

千尋の底の波間をわけて海松布かる。和布

胸つぶしうほやくしやりめす。親もない

しい。岩を穿ち土を掘つても一滴の酒はなし。盃なし。地めでたいといふ詞が三々九度ちやといひければ。調ハア此のいやしい海士の身で緋の袴とはおやばちかぶる事。都人に縁を結ぶが身の大慶。七百年生きる

仙人の薬の酒とは菊水の流れ。それをかたどり筒につめたも此の島の山水。酒ぞと思ふ心が酒。此の鮑貝のお盃戴き。調今日からいよく親よ子よ。地て、様よ娘よとむぞうか者とりによぎやアつてくれめせと。言へば各打ち笑ひけに尤と菊の酒盛。あはびは増殖の玉の盃さいつさゝれつ飲めうたへ。三人四人が身の上を硫黄が島も蓬菜の。島に譬へて汲めども盡きぬ。フシ泉の酒とぞ樂みける。康頼沖をきつと見て。調ハア、漁船とも覺えぬ大船漕來るは心得ず。地あれよくといふ中に。程なく着岸京家の武士の印をたて。汐の干潟に船繋がせ。兩使汀にあがつて松蔭に床几立てさせ。調流人丹波の少將。平判官康頼やおはする

と高らかに呼はる聲。地夢ともわかす丹波の少將是に候。俊寛康頼候と。我先にとふためき走り二人が前にはつくと。手をつき頭を下け躡る。調瀬尾太郎が首にかけたる赦文取出し。是々赦免の趣拜聴あれと押し開き。中宮御産の御祈によつて非常の大

赦行はる。鬼界が島の流人丹波の少將成經。平判官康頼二人赦免ある所。いそぎ歸浴せしむべきの條件の如しと。地讀みも終らず二人はつと平伏せば。調なう俊寛は何とて讀み落し給ふぞ。ヤア瀬尾程の者に讀み落せしとは慮外至極。二人の外に名があるかは見よと差出す。地少將判官諸共には不思議と讀返し繰返し。もしやと禮紙を尋ねても僧都とも俊寛とも。書いたる文字のあらばこそ入道殿の物忘れか。そも筆者の誤りか同じ罪同じ配所非常も同じ大赦の。二人は赦され我獨り誓の網に漏れ果てし。菩薩の大慈悲にも分隔のありけるか。疾に捨身し死したらば此の悲みはあるまじ

き。もしやくと存らへてあさましの命やと。スエテ聲も惜まず泣き給ふ。調丹左衛門懐中の一通出し。とつく申し聞かせんすれども。小松殿の仁心。骨髄に知らせん爲暫くは控へたり。是聞かれよと聲を上げ。何鬼界が島の流人俊寛僧都事。小松の内府重盛公の憐愍によつて。備前の國迄歸參すべきの條。能登守教經承つて件の如し。何

三人とも御赦しか。なかく。地ハアくはあと俊寛は。眞砂に額をすり入れく三拜なして嬉し泣き。少將夫婦平判官夢ではなにか誠かと。踊りつ舞うつ悦びは猛火に焦けし餓鬼道の。佛の甘露に潤ひて如清凉池と歌ひしもフシかくやと思ひやられたり。調兩使詞をそろへ。調最早島に用もなし。仕合せと風もよし。地いざ御乗船尤と四人船に乗らんとす。瀬尾千鳥を取つて引きのけ。調見苦しい女め。見送りの奴ならばそこ立ちされと腕付くるイヤ苦しからず。此の少將が配所の中厚恩の情を受け夫婦となり。

歸落せば同道と堅く申しかはせし女。御兩人の料簡を以て着船の津迄乗せてたべ。子孫々迄此の恩は忘れじと手をすつて詫び給へば。思ひもよらずやかましい女め。誰かある引きすり退げよと弄いたり。地ハテ

料簡なければ力なし。此の上は少將も此の島に止つて都へは歸るまじ。サア俊寛康頼船に乗られよ。圓いやく一人残し本意でなし。地流人は一致我々も歸るまじと。三人濱邊にどうど座を組みヌエテ思ひ定めし其の顔色。丹左衛門心ある侍にてこれ瀬尾殿。調斯様にては君御大願の妨。女を船には乗せずとも一日二日も逗留し。とつくと有め得心させ。地皆々心能くてこそ御祈禱ならめと。いひも切らせずヤア、そりや役人の我儘。調船路關所の通り切手。二人とある二の字の上に能登殿が一點加へて三人とせられしさへ私なるに。四人とは何方の敵し。地所詮六波羅の御館へ渡すまでは我々が預り。乗らぬとて乗せまいか。調俊寛が

女房は清盛公の御意を背き首討られた。有王が狼藉凶人同然の坊主。地雑色ども郎等ども三人共に船底に押込め動かすな。承ると匹夫ども千鳥を突退け三人の小腕。引立てく狩人の餌香に小鳥をつむるが如く捻付けく。殿しく守る瀬尾が下知。船出せ

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

く乗り給へ左衛門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟あれば力なく同じく船に乗り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日よ御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。調養虫の様な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エ、むごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乗せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はな

べと。地よろほひ寄れば瀬尾の太郎。大きに怒り飛んで下り。圓ヤアづくにふめ。左様に自由になるならば教文もお使も詮なし。地女はとても叶はぬうぬめ乗れと嗤みかゝれば。それは除り料簡なし鬼角お慈悲と騙し寄り。瀬尾が差いたる腰刀抜いて取つたる稻妻や。左手の肩さき八寸ばかり切り込んだり。うんとのもれどもさすがの瀬尾差添抜いて起き直り。打つてかゝるもひよろしく。柳。僧都は枯木のゐざり松兩方氣力渾の砂原。踏込み踏抜き息切れ聲を力にて。フ愛を先と挑み合ふ。船中騒げば丹左衛門触板にあがり。御帳面の流人と上使との喧嘩。落居の首尾を見届けて言上する。下人ども助太刀すな。地脇より少しも構ふなど眼もふらず檢分す。千鳥堪へかね竹杖ふつて打ちかくる。圓僧都聲をかけ寄るな。杖でも出せば相手の中科は通れぬ。地差出たらば恨みぞと。怒れば千鳥も詮方なく心ばかりに。フ身をもんだり。地血ま

ぶれの手負と飢に疲れし瘡法師。はつしと打つてはたち。刀につられ手はふら。組みは組んでもしめねば左右へひよろりと離れ。砂にむせて片息の兩方危く。三見えけるが。地瀬尾が心は上見ぬ驚。攫みかゝるを俊寛が雲雀骨にはつたと蹴られ。かつばと伏せば這ひ寄つて馬乗りにどうと乗つたる刀。止めを刺さんと振上ぐる。船中より丹左衛門勝負は急度見届けた。止めを刺せば僧都のあやまり科重なる。止め刺す事無用々々。ヲ、科重なつたる俊寛島に其の儘捨て置かれよ。いや。御邊を島に残しては。小松殿能登殿の御情も無足し御意を背く使の越度。殊に三人の數不足しては。關所の遠論叶ひ難しと呼ばはつたり。されば。康頼少將に此の女を乗すれば人数にも不足なく。關所の遠論なき所。小松殿能登殿の情にて。昔の科は教され歸洛に及ぶ俊寛が。上使を切つたる科によつて。改めて今鬼界が島の流人となれば。地

上御慈悲の筋も立ち。お使の越度いさ。かなしと。始終を我が一心に思ひ定めし止めの刀。瀬尾受取れ恨みの刀。三刀四刀肉切引切る首押し切つて立ちあがれば。船中わつと感涙に少將も康頼も。手を合せたるばかりにて。フ物をも。いはす泣き居たり。地見るに付け聞くに付け千鳥一人がやる方なさ。夫婦は來世もあるもの。圓わしが未練で思ひきりのない故島の憂き目を人にかげ。地のめ。船に乗られうか皆様さらばと立ち歸る。縋り止めて是。我此の島に止まれば五穀にはなれし餓鬼道に。今現在の修羅道硫黄のもゆるは地獄道。三惡道を此の世で果てし。後生を助けてくれぬか。地俊寛が乗るは弘誓の船浮世の船には望みなし。サア乗つてくれはや乗れと。袖を引きたてやう。抱き乗せければ。せん方波に船人は纜といて漕ぎ出す。少將夫婦康頼も。名残り惜しやさらばやといふより外は涙にて。船よりは扇を上げ陸よりは手を

上げて。互に未來で／＼と呼ばはる聲も出舟に。追手の風の心なく見送る影も島がくれ。見えつ隠れつ汐ぐもり。思ひ切つても凡夫心。岸の高見に駈上り。爪立てて打招き濱の眞砂に伏しまろび。こがれても叫びても。哀れとふらふ人ととも。鳴く音は鷗天津鷹誘ふは。己が友千鳥。一人を捨て、沖津波幾重の。袖や濡すらん。

第三

顔回は早く天して終に四十の花を見ず。盗路は命長うして既に八十の霜を踏む。生死不定の理は上智博識も辨すべからずとや。小松の大匠重盛公。御所勞日を追つて衰へ給ひ。和丹兩家の典藥配劑醫家を盡せども。更に其の驗なく既に大事と見えければ。嫡子維盛を始め通盛知盛重衡資盛。其の外一門の老若寢殿に居流れ給へば。廣庇には主馬の判官盛國。筑後守貞能。彌平兵衛宗清など。マシ心を惱し並み居たる。御典藥和氣の法印奥より立出で。今朝の御

脈夜前の通りに相變らず。謹んで御容體を考へ奉るに。是ぞと名付けん御病氣なく。只七情に破られ給ひ。御氣の疲れ御心の結ほほれ深く見えさせ給ふ。何にても興ある御慰を催し御覽に入れ。地暫しが内も面白しと御心晴れ給は。御保養となり藥力もめぐり候はんかとぞ申しける。維盛聞き給ひ。實にさぞあらん。祖父入道殿邪の御振舞。歎きは父重盛只一人。一天四海を引受けて御身一つの病となるも理かな。地何をかな氣もはれて心に叶ふ慰み。方々も思ひ寄り頼み存すと宜へば。各はつと頭を傾けどうかかな。ハア何とがなと思案マシ評定取り／＼なり。新中納言知盛進み出で。御慰とて常々目馴れ給ふ事はさして興にもなりがたし。彼の白樂天か酒興山の景氣を倣ひ。庭前に酒の泉を掘へ美女を集め。琵琶琴調べ謠ひ舞ひ奏でさせば。終に御覽なき事にて。御心の開くる事もやとありければ。越前の三位通盛聞きもあへず。趣向珍し／＼さり乍ら。平生酒宴亂舞好み給はぬ重盛公。却つて御氣に障らんか。通盛が存するは。同じ酒を用ゆるとも。庭に大竹小竹數千本植ゑさせ。酒の甕をしつらひ七人の樂人に。胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し。竹林の七賢が樂みを倣んで如何あらん。地相詰めし者ども存じ寄り遠慮なく申して見よとぞ仰せける。主馬の判官盛國つと出て。恐れがましく候へども。我が君常の御戯れにも上を敬ひ下を憐む御心より。北の御庭に方一町の田をひらかせ。毎年御領内の土民を召され。地耕し植ゆる賤の手業民の辛苦を御覽ある。今年も荒田はすきかへし候へども。御所勞によつて未だ田植の御沙汰なし。地折しも此の頃の雨に潤ふ早乙女の田植を御覽に入れられれば。御心にも叶ふべしと言上すれば。地知盛實に是も興あらん。所詮目錄に書付け何はんと。地人々相具し大床の。マシオリ御座の間へさして出でらる。地十返りの霜には朽ちす一

時の。無常の風に枝枯れて。スエテ頼み少き
小松殿。地父入道を諫めかね。世を思ふゆ
ゑ身を思ふ思ひ積りし日蔭の雪フシ消ゆる。
間を待つばかりなり。維盛枕に近づき。詞
御病中の御慰と一門の心ざし。御望みあれ
かしと日録を奉れば。地助け起され脇息に
フシかゝるも暫し。玉の緒の。弱りを見せぬ
フシ親心。披見あつて打ち笑み給ひ。詞重盛
が病氣を悲しむ。各心を盡さるゝ返すくゝ
も淺からね。地此の書付の内早乙女に田を
植ゑさせんとの物好き。我毎年の慰みにて
庭の田の面を見るにつけ。去年の田植もな
つかし。用意させよ見ようするわと宣へ
ば。地盛國畏つて罷立つ所へ。熊野本宮
の別當湛増白木の箱を携へ周章しく御前に
出で。本宮の社壇修覆のため。神體を假に
宮遷致す所。いかなる者の所業やらん此の
箱をこめて置きたり。私に開かん事後難測
りがたく御注進とぞ述べにける。よし何に
もせよ推量の詮議無益の至り。それ開け承
ると貞能蓋こち放せばこはいかに。厚板を
削りならし衣冠束帯の人を畫き。總身に四
十九本の釘胸板首に矢の根を打ち込み。日
本第一三所権現に申し奉る。小松の内大臣
平の重盛が運命を縮め。源家の弓箭を擁護
し給へ。兩箇の所願偏に冥慮を仰ぐ者なり。
願主蛭が小島の住。源の頼朝と書き記し。
地調伏の願書を添へ置きたりけり。人々は
はと手を打つてフシ呆れ果てゝぞおはしけ
る。地重盛怒りの御涙を。はらゝと流さ
せ給ひ。扱もく天恩知らずの悪人めやな。
去んぬる平治の合戦に既に誅すべかりし
を。池の禪尼と重盛が身に代へて願ひ助け
し故。扱こそ。流罪してはあれ。彼の唐土
の獨角獸といふ獸は。水上の惡毒をおのれ
が角にてそゝぎ消し。國民の命を助くれど
も獵師は恩をわきまへず。獨角獸を殺して
角を取る。これ頼朝めに相同じ。敵味方と
なるならば鋒先は磨かずして。重恩の重盛
を調伏とはあさましや。此のたび我が病氣
は父の惡心やむまじくば。我が命を取り給
へと熊野権現に立願しての死病なれば。死
するは小松が願成就。詞それとは知らず頼
朝が。己れが願成就と。地悦び思はんフシ愚
かやな。地重盛空しくなるならば。見よく
源氏の白旗を秋津洲に翻さん。エ、恨めし
きは入道殿。はかなきは平家の運命一門の
なれの果。思ひやられて口惜しやと。怒れ
る眼に涙を浮べ御聲ふるひ枕をつかみ。エ
エテ歎き沈ませ給ふにぞ。御前伺候の人々も
實に御道理ことわりやと。フシ各袖をぞ絞
らるゝ。よし。盛衰は天にあり。悔むま
じ恨むまじ。時こそ移れ耕作を見物せん。
疾々と宣ひて既に。田植ぞ三重。早苗とる。
フシ水のみどりも。青々と。御簾も障子も明
け渡り。いつに勝れし御機嫌と。上下悦び
勇みけり。地折から愛宕の里の長手には持
てども心には。くはない顔の白髭を土にす
らせて色代し。詞なう。早乙女おじやら
しませ。翁があら田をとろりつとならし濟

いて。萬歳五穀成就君萬歳。

民も千秋々々

たづら花やうちや匂ひ渡つた

入れ。放埒いたづら狂ひとも申し。別れ弟を失ひ。かゝり子に放れ路頭に立ち

と。調水口も祭りすまいた。地田をばぞん

く早乙女千町ッ万町 二入億萬町の早苗

飢死する親もあり。夫をとられ泣きこがれ

ぶりぞ。ぞんぶりくくぞサアナ

より兄や弟や。妻や子を返してたもるなら

狂氣する女もあり。五十人か百人こそよむ

ウお田を植ゑよ。はつと答へて早乙女は着

民も豊に君が小田は三人産實のるぞ程なかる

に數がぎりもなし。洛中洛外の苦み上には

つれて笠のおくれじと。手ん手に早苗取り

らん實のるぞ。オホ程なかりける。謠ひ終

お耳にたゝぬか。但し知つても知らぬ顔か。

はやす。外に類ひも。シテあら金の。地土に

れば一座の人悦び。ざゝめき給ひけり。

此の翁が直訴し重盛公のお耳に達し。御

よごれぬ田植歌。シテうゑいく早乙女。

重盛御耳を敬て。田な植ゑさせそあれとめ

詮議願ひ奉らんと男失ひし女ども。地何れ

めでたき君がお田植。苗代におり立つて田

よ。問ふべき事あり早乙女等具して來れ。

も早乙女に出立たせ斯くの仕合。推參は御

を植ゑば笠買うて着せうぞ。ワキ笠買うてた

畏つて雑色ども。御用あるぞ早乙女ども御

免あれと申し上ぐれば。女子ども聲々に。

もるならば猶も田をば植ゑよ。シテ調いか

前へ參れど呼ばはれば。ひつしよ形振り早

私むすこは坊主墮。ろくに生掛はぬ物常磐

に早乙女。懸想文がほしいか。失せた夫が

乙女の手足も土にひれ伏せり。近く寄れ

が何にせらるゝぞ。地我等が兄は提灯屋。

ほしいかワキ水上が濁りて。下の歎きが口

女ども。夫をかへせ子をかへせと訴訟あり

張替もないたつた二人の兄弟。こちの夫

に見えぬ。地夫返してたもるならばなんほ

けの田植歌。汝等誠の早乙女にあらず包ま

はから確踏み。腰から下の強い男。地惜しい

嬉しからうよ。調男が見えすばそれなり

す申せと宜へば。銀取りの翁頭をもたけ。

事故したと。誰に恐れも泣き喚く。女心の

に。當代のはやり物。地後家狂ひせよ眉目

仰の如く斯く申す翁を始め誠の早乙女に候

ひとむくろ。フシ思ひやられて哀れなり。地

わるワキ調工頼にくの男が。いうたる事や腹

はず。君知召されすや。入道相國のお妾常

大臣御息ほつとつき。我病に臥して政務

立ち。シテ腹が立つならば水鏡見よかし。ワキ

磐御前のまします。朱雀の御所の邊を通れ

を辭し。民の訴を聞かざれば。地はやか、

水鏡見たれば顔のよごれた世の中。朱雀

ば貴賤に限らず。男たる者かいくれに行方

る事の出来るは。當家の徳の薄きより洛中

の御所の築山に。花の咲いたを見たるか。ワ

なく。地再び影も見る事なし。狐狸の所爲

の騒ぎ。後の禍輕からず。きつと糺し得

キ實にきつと見たれば。シテ戀の花や。ワキい

とも申し。調又は常磐御前往來の男を呼び

鳥

さすべしヤア、彌平兵衛宗清。詞汝常盤が館の次第とつくを見届け吟味せよ。狐狸の業ならば獵師を以て狩り取らせよ。常磐が不義放埒に極らば。きつと質否を糺し。

入道殿へ言上なし御指圖に任せよ。又末々平家の仇となるべき事と見るならば。誰に問ふ迄もなし。入道殿の思ひ者として用捨すな。常磐なりとも討つて棄て詮ずる所は

これ第一。心得たるかと宜へば。宗清謹んで畏り。御説違背申すにてはあらねども。もと某は源氏重恩の侍。殊に相具し候女房は先年離別の後に相果て。今生になき身と申しながら。藤九郎盛長が妹。かたぐ

と申しながら。源氏に好みの筋目。詞刺へ一人の娘を女に付けて別れしが。只今成人していかなる源氏方に縁を組みしも測りがたし。彼は以て常磐御前の詮議には。源氏無縁の他人に

仰付けられ然るべしとぞ申しける。詞小松殿聞き給ひ。地苦しげなる顔ばせに。立腹の色顯れ。詞心得ぬ事をいふ者かな。源氏

譜代の汝なれば常磐が常の行跡。心入れも能く知つたらんと思ひよつての事。明日にも源平鏖を争ふ時。源氏譜代の宗清。軍の御供用捨あれといふべきか。よもやさはいふまじ。源氏昔の恩を思は。今又平家の

祿を食む其の恩賞よも忘れじ。地義ある武士と見定めし我が眼力。重盛が臨終も今明日に極つて。明日の夜迄は不定の命。病み

つかれて眼くらみ最期に人を見違へしと。死後に小松が名をくだすな。早急け宗清と床の綴帳。フレ御簾もさつとおりければ。宗清あつと頭を下け。詞文武二道の賢將義ある武士との御詞。生前の面目武門の譽。

地あはれ御全うして御馬の前にて討死し。御恩報せぬ残念至極。もし宗清狂氣して御眼力を違へなば。冥途より御手を下郎にかされ。歩に首をさけ給へはやお暇と罷立つ。

源氏の恩平家の恩。ひかれ繞まぬ梓弓やたけ心ぞ。三思へたのみある。フシ団女とや悪口に。地是をいへば夕づく日朱雀の御

所は女護の鳥。むかしは源氏の春の園義朝の花紅葉。今日は平家の秋の庭。清盛の月雪と。オラ見手はかはれど變らぬは。常盤御前の起臥の獨りで足らぬ御身持。お腰元の笛竹お髪上の雛鶴が。男見立ての仰せを

受け裏の小門の物見の亭。往來の人の風俗を見おろす簾捲上げて。今日も替らぬ役目とて口へも入らぬ善惡に。フレ男待つ風し

どけなし。詞なう笛竹殿。いづぞはくと思ひしが幸ひ外に人もない。常磐様はお氣合が悪いとて。床も離れず藥もんぢやくい

つ浮きくともなされぬに。來る日くも二人か三人が往來の男呼び入れて。お精の強い上々には何がなる物ぞ。あれではお煩

ひもなほらぬ筈。地清盛様へ聞えてはお身の大事。わしらや此方もよいとはあるまい。怖うてならぬと頼ひ聲。詞ア、氣遣ひない。く。笛竹が何も飲み込んだ。今日は何時より通りが薄い。それでもよい男せめて二人程つらねば其方もわしも一分たぬ。

ヲ、合點といふ所へ。素袍袴に掛烏帽子こりや歴々の侍。但し公家方の詰太夫か。あれ程の人體に破れ扇は不都合な。エそりや儘よ。是そこな烏帽子殿。地爰へくと招かれて小腰かゞめ聲はり上げ。舞ハヤメ萬戸が其の日の装束には。阿耨菩提の腹巻に。隨求陀羅尼の小手をさし。斷惡修善の脇當をあくち高にしつかと穿き。大唐練小唐練。二振の劍十文字にさす儘に。神通自在の葦毛の駒。壓劫不思議の浮香はかせ其の身かろけに乗つたりける。ヤツアイエイイヤホ、萬戸將軍雲宗とて。く。阿、しんき。此處へおじやしつほりと言ひたい事がある。地先つ待ちやくと雛鶴亭よりおるを見て。阿エ扱はしつほりが御所望か。舞あら痛はしや蟹人は海上にうかみ出で。乳の下をかき切り玉を押し込め申したり。こもかも探つて見給へ我が君と只さめぐくと泣き居たる。阿ム扱はまひ舞か。まひ舞

でも舞まひでも大事ない。是御門の内へおじや。結構な目に逢はせう。地こんな事じやと耳に口よせ。斯ぢやくと叫べば。まひ舞色ちがへ。舞ハヤメ萬戸此の由聞くよりも。あら怖や恐ろしや。是龍宮のつゝもたせ三百目の王塔に。其の外惡魚しかけ物。週れがたしや我が巾着とフシ跡をも見ずして逃げうせる。阿なう笛竹殿。むだ骨折つたぢやないかいの。いやくと一のうらは六陸路かろけにそれそこへ。地狀箱かたけ飛脚の足淀から三里に炙もなく。脇差一腰フシさしもぐさ。燃立つ汗にむくつく髭もすけべいの。への字なりが面白い。腰骨太い達者づくり是がお上の好物男。やれそれ運すな呼び込めと。雛鶴飛ぶより足早に。袖を控へてしみくと叫べば甘い奴。じろりと見た目にほやりと笑ひ。フシ連れて内にご入りにける。フシ跡に續いて聞ゆるは。地小歌うたふか何いふぞ。顔見ぬ先の聲のあや。阿鯨やさし鯖かは鮓めぐる。鯛のす

き實干かます鯉節。干鰯鰯だらくと。フシだらつき聲にて通り行く。それ雛鶴その魚賣呼びやいなう。阿イヤく今日は義朝様の精進日。せめて冥加に魚賣は遠慮なされといふ所へ。地旅する武士の高からけッ股引脚絆頰かぶり。南の方からそれ來たぞ。まつかせやらぬと雛鶴が叫く顔をふり切つて。行き過ぐるを縋りつき。猛き武夫の心をも柔ぐる。歌も戀路を種と聞く小オトリいかなる。武士もいな船の押すに押されぬ。此の道を。フシとまらせ給へといひければ。阿さすが岩木にあら男。心弱くも立ちとまる。所は朱雀の御所の門オツつれて入る日もくれ過ぎぬ。フシ常磐御前の。帳臺の夜の光りは雲井にも。劣らぬ露の奥座敷あひの。廊下を笛竹が晝の飛脚の手を引いて。フシ案内をてらす燈火に。地動きもやらず立ち止まり。阿こりや何處へ連れて行きめすぞ。地白癩歸してくれられよと齒の根も合はぬ胸ふるひ。阿これ怖い事何

にもない。此の奥に御座なさるゝは聞及び
もあろ。千人中から百人選み。百人中より
十人えり出し。十人の内に一人勝れた常磐
御前とて。それはく美しい君。そもじに
たんとほの字ぢやと嬉しいか。これ。地こ
んなめに逢ふ事と叫げば身を捻ぢて。俄に
つくるつほく口。詞エ嘘ばつかり。おら
が様な者に此のかま髭で。頬ずりは痛かる
ものわしやいや。エ氣の弱いこれ地此の帷
子着ていきやと。帯引きほどく肌は鍋の底
氣味わろく。詞こりや何といふ帷子。ム、
柔かな身について動かれぬ。いはぬ事はわ
るい此の帷子も着取り。我等が身の廻り一
色も散らす事ならぬぞや。地それを氣遣ひ
する事か。夜ふけぬ内に爰からと杉戸開い
てつき出せば。一足行ては躓つきすべる飛
脚の騙つはぎ。さるにても我千里を股にか
ける斷賣。一度も歩みかねぬ身が。一足も
動かかれぬ。智恵こそあれと四つ這ひにオッリ
はふく明る障子の内。フシ燈火幽かに寝
姿を。見るよりぞつと身もしびれ。蚊帳の
外に蹲り。伽羅の薰にむせ返る。地蚊帳
の内より常磐御前。手を引きよせ是待つて
居るサア爰へ。此の手のきやしやな事わい
のと。じつとしめられ現をぬかし。こりや
あんたる因果骨。めきくいたす御免あれ。
お辭儀申さぬ申さぬと。蚊帳引きあけてぬ
めり込む常磐は押へて。詞ア、待ちやく。
眞實抱かれて寝る氣なら。我がいふ事を背
くまい。他言せまいと此の誓紙に血判すゑ
て上の事。物も書くらめ是見よと。地扶の
内の一卷を渡せば取つて押しひらく。杉戸
の外には笛竹が耳を欬て息を詰め。窺ふ内
のひそく迄。フシ洩るゝ方なく聞ゆらん。
地讀みも終らずわなく。頭ひなう恐ろしい
文言。是に判形存じもよらず命が大事と駈
出す。大事を知らせて行なさうかと引きと
むる常磐の小腕取つて突き退げ。爰を大事
と足はやく。走る杉戸に額打つやら當るや
ら。やうく押し開きぬつと出れば笛竹が
追取刀につつ立つたり。つとわなゝき身
を縮め。フシ二度顔ひあわてける。詞コリヤ
男。常磐御前に頼まれて源氏の方人申した
か。奥の様子をサア語れ。なう勿體ない今
の世に見る影もなき源氏に頼まれ。平家の
咎め何とせう。思ひよりよらずと言はせもあ
へず。地拔打に向ふさま天邊より太腹まで。
節々込めてから竹わり二つにさつと笹の
露。散る魂のもぬけの殻。廊下の敷板こも
放し掘置く土の穴かしこ。人には見せじと
骸を取つて引きすり込む。音に驚き雛鶴刀
提げ出で何と首尾は。詞さればく見かけ
た。一味して戰場に討死するも死は同じ。
地愚人め故に今日も亦思はぬ殺生南無阿彌
陀。エ、まだるい念佛どころか次の男がも
う爰へ。いつも通り死骸は埋む。跡を首尾
ようくとオッリ縁のへ下へ這入れば。地笛
竹手水の水汲みかけ。流す血汐のからくれ
なる神代も聞かぬ女業。あたりに目を付け

日の鞘はずす刀の血痕。押し拭ひ、袖にをさめし顔容。権輿なりふり引きつろろひ物音うかゞひ立つたるは。昔神功皇后の娘の時もかくやらん。フシ外に比ひもなかりけり。地續いて以前の侍人目忍ぶの頬かぶり。笛竹に近付き。詞羅鶴とやらの物語に。奥の様子承る。よい年をしてなんと蔑視も恥かし。頬かぶり御免なれ御案内と述べければ。ア、御案内申すまでもない。此の邸下をと戸を開けば。地月さへ洩らぬ長廊下たどりく、て閨の内燈火そむけかけ香やそら薰物ふすべられ。蚊は一疋も夏の夜のフシ蚊帳ぞ閨のしるしにて。地急へんく打ちしはぶくも聲清めり。詞待ちかねしもこのれ男。思はせ振りの咳なんぞ。どなたの花が知らねども。地今宵ばかりの一枝は折りも盗みもお許しと。蚊帳越に抱きつけばとかうもいはず振り放す。エ、詞憎くもがかせて慰む氣か。地清盛といふ人なくばいつそ女房になりたい。ハア鐘が鳴る夜が

更ける。爰へと蚊帳押ししけいつ迄包む頬被りと。取つて引きのけ顔見合せ。詞ヤア彌平兵衛宗清か。地なう恥かしやと押しうつむきエテ消えも入りたき風情なり。地宗清常磐に目もやらず顔打ちちつて獨言。詞あつばれ宗清は今小松殿といふ能い主取つた果報の武士。古への如く源氏を主人と仰ぐならば。世間に恥辱をか、ん物。ハア、嬉しやく。俊寛が妻のあづまやが最期の詞。常磐が如き汚れた根性さけまい物。道知らず淫奔者と笑ひ誹つて其の身は伊弉册算以來。貞女の手本を世に残し。及に伏して空しくなる。地思へばあづまやは四相を悟る女賢人。小松殿も賢人。詞平家の仇となる事あらば常磐とて用捨すな。討つて棄てよとの仰せ。地淫奔に極れば平家に弓引く仇にもあらず。其の身ばかりの恥辱か養朝が屍の恥。詞牛若といふ伴が生先源氏一統の恥辱。恥さらしさりながら。今宗清が主でなければ構はぬこと。狐狸が人をばか

し失ふにもあらず。地常磐が不義放埒と申しあぐる上の事と。ずんと立てばなう暫くと引きと、め。詞常磐が不義とは情なや。俊寛が妻の自害は身の貞女を守るばかり。死んで源氏の爲にならばあづまやづれに負けうか。生きて心の辛抱は。ア、恐らく常磐には及ぶまい。牛若を助けんため清盛が心には従へども。病と偽り帯といて一度も肌を汚さぬ者。そもやそも往來の人を呼び入れて仇の枕を並べうか。詞牛若は日蔭者誰を便りに詮方なさ。往來の人を呼び入れ色に迷ふは男の習ひ。騙し賺したらし込み心を見届け。地従ふ者には源氏一味の血判させ。牛若に義兵を上げさせ。平家一門の首を見ん爲と。いふ詞を打ち消してぬかすなく。詞嘘つきの常磐め。今おのれが不義を見付けられ。當惑しての造り言。地聞くも弓矢の汚れなりと。立つて行くを又引きとめ。詞いや常磐に不義のない事は聞い

さほりつくを取つて突き退け。エ、平家に敵たふ常磐ならば。討つて棄てよと御意を請けた宗清に。偽り者恥知らずと懐中の巻絹。一捻ねらて丁々々。淫奔者とはたと打ち不義者として丁と打ち。詞さけがみ黒髪を。フシ寝ぐたれ髪と打ち亂す。地杉戸隔て笛竹が南無三寶願れしと。裙はし折つて杉戸蹴放し。袂の下の二尺三寸隙をあらせず切りかけた。老功の宗清抜き合せ渡り合ひ。ふみ込みく打合ふ音。常磐驚き杉戸はづし引つかへ。あひの小桶と身を捨てて前におほひ後にへだて。とめてもとまらず抜けつ潜つ。太刀とくの閃く影。暗夜の稻妻流る、汗、フシ軒の雫の如くなり。地常磐御前聲をかけ。おとなげなし宗清。はやまるな牛若丸母がいふ事聞かぬかと。地制せられ飛びしさり。同エ、無念な源の牛若が。大事を思ひ立つゆゑに母上と心を合せ。下女腰元に様を變へ心を盡すと聞くならば。忠節をなすべき所。主君たる母君

をなぞ打つたなぞたゝいた。ヤア主君とは舌長なり。彌平兵衛宗清が今の主人は平家の大將小松殿。平家の仇となる者は討つて棄てよ。義ある武士と見極めしと御目がねを以て向うたる宗清。不義放埒の常磐手を以て打つも腕の汚れと。地肌身も放さぬ此の雑巾を以て打ちたるは。有難しとは思はぬか。不義者の恥知らずに廻り逢ふ事あるべきかと。隠し置きたる此の雑巾。親子の恥を押し拭ひく。早立ち退けと巻絹取つて。牛若の額にはたと投げ付たり。同エ、推参なりいで切り裂いて捨てんと。引きほどけばこはいかに。地正八幡大菩薩とありく。記せし源氏の白旗。二人ははつと押し戴き。同我々にめぐり逢ふ迄と肌身も放さず持つたるとや。地今此の旗を拜する事父義朝の蘇生とも。千騎萬騎の味方とも此の上のあるべきか。奥深き宗清の心を付らす卒爾の難言。許してたべ宗清と親子手をさけ。頭をさけステ伏沈み給ふを見て。色

には出さず宗清も。つれなの人界や譜代の主人に手をさけさせ。冥加なし勿體なし痛はしとさへいひやらぬ。奉公の身のあさましやと思へば胸も裂くるばかり。萎る、嘘を見開きく。せき來る涙を飲み込みく。フシ遊面つくるぞ哀れなる。同ヤ主人顔して怪我するな。牛若と聞けば適されぬ。宗清を一太刀討つて親子共にはや立ち退け。地サア立ち退けとせきければ。ヲ、誠ある宗清の詞は父の教訓。いざ立ち退かん尤と走り出づればこれく。同小松殿御眼識の宗清。おめくと見遁して我が武士道立つべきか。此の宗清を一太刀うて討つて立ち退けくと呼ばはつたり。地ム、尤と牛若飛びかかり太刀振りあぐれば。常磐は縄つてやれ情なや。心ざしの宗清に太刀をあて天の咎め氏神の御爵。苔の下なる義朝の御照覽も恐ろし。たとへ親子が此の儘に一生を朽ち果すとも。道を立て義を立て誠を盡す侍に。何と刃が當てられステ許し

てくれと泣き給へば。宗清、いひがひない。薄手も負はず落しては。宗清が武士が廢るが。いやそれでも切らさぬ。いや討て。いや討たさぬと義を争ふ。宗清、曲もない。腹を切るは易けれども。敵を見てぬくくと腹切つては逃けたも同然。地小松殿の御詞昔はともあれ。今は平家の縁を食む。我が死後迄も眼識を遣へな。畏つたと請合し一言は須彌山より猶重し。地彌平兵衛が一生の廢ると知らぬ恨めしやと。睨みつくる血眼に涙も交る聲の下より縁の下。數板のはづれより宗清が弓手の高股ぐつと通す切先は。フシ朱に染みて顯れたり。地人々はつと驚けば宗清につこと打突ひ。誰かは知らず我を突きしは源氏の忠臣。サア宗清こそ牛若に出合ひ。深手を負うて討ち洩らした。ヤレ退けくと呼ばはる隙に。地牛若縁の數板引きのけ給へば。雛鶴が顔も容も朱に染みて這上り。なう懐かしの父上や。一歳母上に連れて別れし娘の松

が枝。今の名は雛鶴ゆかしう御座るとフシばかりにて縋り。付いて泣きけるが。地母上に後れてより常磐様に仕へても。我宗清が娘とは今日といふ今日いひ始め。最前よりのお詞始め終りを縁の下にてつくく聞き。お主の命も助けたし父上の武士も立てたく。親の身に刃を當て八逆罪を身に請けしは。親と主とのフシいとささぬ。ア牛若様常磐様。早うおのきなされませ。なう父上しるしばかりにちよつと切らうと思つても。推當の切つ先が地悲しや思はぬ深疵。たつた一言許すといふ。詞をかけて下されと。血を吸ひ拭ひ。疵を撫で聲も。惜まず泣き居たる。地宗清も諸共に。せぶ涙を押しかくし。離別の母が娘なれば。親でなし子でなし。女なれども源氏の郎等。平家方に刃を當て許せとは何事ぞ。源氏方には誰ならん。藤九郎盛長が姪松枝ならずや。縁の下より突かすともなせ名乗りにかけては討たざるぞ。地宗清が濡いか卑怯

者の腰拔め。とはいひながら出來しをつたとフシ引寄せて縋り。付いて泣きければ。地常磐御前も牛若も扱はおことは宗清の娘かや。血筋程有る心ざし子といひ親といひ。斯る忠義の武士の敵になつたる源氏の運。此の行末も如何ならんと。四人顔を見合せてスエテわつと泣き入るばかりなり。宗清は猶泣かぬ顔。地ヤイ慰みに人切るか。主君を落す爲ならずや。地お供申して立ち退けはえなくと突き退くれば。二人落しましよ我が身は残つて父上の。看病させて下されと。又立ち寄るをはつたと睨めつけ。地母さへ離別したるもの。看病とは狼狽へしか。手負に心を揉まするな。勘當といはぬを嬉しと思はぬか。地但し勘當請けたいか不孝者めと呵るも涙。ア、アお供しませうお供せう。アレ父の心ざし立ち退いて下されませと。なくく涙も顔の血も。押し拭ひく先に進めば親子の人の身の大事をも思ひやり。宗清父子が忠節も

思ひやる方、フシ涙ながらに出で給ふ。地宗清
つつ立ち。牛若やらぬ常磐やらぬ。地工
足が立たぬ口惜しやと。態とよろしくどう
ど轉び。おのれか程の薄手にひるみはせぬ
と又立ち上つて太刀を杖。よろりくよ
ろめく姿。見かねては立ち戻り遁さぬ遣ら
ぬは聲ばかり。兩方泣き顔睨む顔。閃くば
かり双向もせぬ。勇者の振舞情あり恩愛あ
り哀れあり。分別あり仁義ある心は太刀の
光りに見えて。義理にひかる、牛若君。親
にこがる、雛鶴が翼しをる、涙の雨。常磐
の森の木の葉の露落ちて。行くこそ哀れな
れ。

第四 舟路の道行

フシ頃は文月。なかばの空。都方にはなき魂
を。迎へて歸る嶺の露。是も都へ歸り行く。
船にそのりの誓ひにて。スエテ鬼すむ島を遁
れ出で。少將成経康頼は。歸洛の船の。旅
衣、フシ今着て見るこそゆゝしけれ。アミドフ
シユリ千鳥。ひとり。泣きこがれ。假初に

親と頼みし俊寛を。跡に残しておきの島。
又あふ島を漕ぎ放れ。餘所に見捨て、ゆき
の島。長地硫黄が島より地の島まで海上七々
四十九里船繋ぐべき磯もなく。蒼海天に連
つて。雲に漕ぎ入る沖津船オクリながめも。
遠く漫々と。北は三韓。フシ壹岐對島。南
は香椎字佐八幡。そもく此の御神は。
すべらぎの御代始めて十六代の尊主。應神
天皇。御裳濯川の底清く神徳昔き夢想の告
げ。鳩の嶺に鎮座あり。他の人よりも我が
人と。誓も固き。フシ石清水。今すみのほる
我々が。二度帝都の雲を踏み。九重の月を
ながむる事皆神明の擁護ぞと。スエテおの
おの法施を奉る。波の白木綿青幣。フシか、
遠國。波濤にも。名所は昔に響きの灘鐘

が岬にあげ渡る。箱崎の松宰府の梅末は蘆
屋の。浦傳ひ蜚の。漁火影もなく。松吹く
風の聲ばかり。今行く船に通ひくるオクリ苦
より、くくくる波は。小倉の雨の糸に似て。
セツユリ波も縮や縮る。らんと心を。フシ結ぶ。

中空に。初雁がねの雲間よりちらく。く
散し書。フシ誰が玉章の文字が關。和布刈
の明神ふし拜み。朝の満千の玉島に。つ
く光や茜さす周防灘とは是かとよ。オクリ濡
れた。姿のあの姫島はナタが思。はくの所
縁ぞとナ沖のかぶろに。フシこと問へば。
灘の男波が打ちよせていつも添寝の床の
島。京とまりては上の關。フシあすは都も。
程近く阿伏兎御手洗ひ久留來島めては。四
國の海面を。走る兎の月を越え。暮れては
明くる日の烏かう。くたる海原島々。

浦々幾港風に任せ艫に任せ。スエテ船は備後
の數名の浦。汐待。してこそゐたりける。
地俊寛僧都の郎等有王丸。主人の遠流赦免
ありと聞きしより。夜を日についで備後の
國。フシ數名の浦に着きけるが。磯に寄せ
たる登り船すはや是かと渚におり立ち。是
は々御船へ物問はう。鬼界が島の流人歸洛
の船は何國迄参りしぞ。類船などはなされ
ずか。地俊寛が郎等有王丸と申す者。御存

じならば教へてたべ。なう是こそ尋ぬる流

人船。丹波の少將成經平判官康頼と。舳板こしに踊り出で給へば。御堅固の歸洛重疊千

萬。法皇の院宣小松殿の情によつて。主人

も赦免と承る有王丸御迎に参りしと。地傳

りながら御傳へと聞くより二人は打ちしを

れ。千鳥を呼出し引合せ。是こそ俊寛の

養ひ娘。僧都と思ひ官仕へせられよと。

地有りつる島の物語。有王はつと途方にく

れ。和工、しなしたり口惜しや。あづまや

御前の最期にも。一足違うて御命助け得ず。

腹切つて申譯と思ひしかど。地島に僧都の

ましませば無念の命ながらへ。待ちおほせ

たるかひもなく。よつく佛神にも捨てられ

しか。娑婆の孝公是迄。腹かき切つて冥途

の忠義念がんと。既にかうよと見えれば

千鳥陸に駈上り。同なるはやまるまい。此

の度歸洛なきとも。死し失せ給ふお身でも

なし。地御先途見届けうと思ふ氣はないか

とスエテ縋りついて止むる所へ。浦守の下人

駈來り。コリヤ、其の船漕いで行け。

清盛様鳥羽の法皇を連れまして嚴島御参

詣。此の浦に御船がかゝる筈。地やれ其の

小船漕ぎのけよ。急げくといひ捨て、

シ次の里へと走りゆく。地丹左衛門尉基康。

有王丸を船近く招き寄せ。成經康頼歸洛

の趣清盛公へ訴へん。此の女性を同船の事

咎められては事むつかし。地俊寛が養子娘

なれば汝が主人屹度預くる。是より陸地を

同道して都へのほれ。アレ舟歌の聞ゆるわ。

はや御船も程近しと、フシ船をかたへに漕ぎ

のくれば。地有王千鳥を介抱し。一村繁る

蘆蔭にかくる、程も波の上。はや御座船の

棹の歌。舟唄やんれ龍頭りゅうづつ首の金の。槓こしらやア

玉の棹綾やや。錦を帆に上げてやらんやら。

おめでたい釣る。鹹釣あまづりる磯邊いそべにナホス。錨いかりをお

ろしける。地流人船漕ぎよせ。地丹波の少

將成經平判官康頼を召具し。丹左衛門尉基

康只今歸洛仕る。御披露と訴ふれば。地御

簾あけさせ船館ふねやうに法皇安座ましますば。席

をならべ清盛入道。我が下知を背いて俊

寛も歸洛させよと。病ほうけたる重盛をた

らし。赦文しよぶんくださせたる者ありと聞く。俊

寛も連れ歸つたるか。御説の如く一所に歸

洛すべき所。瀬尾の太郎と不慮の口論によ

つて。瀬尾を討つたる科に任せ俊寛は直に

彼の島に残し置き候と申し上ぐる。地法皇

はつと御驚き。入道くわつと色を損じ。地

しやつ憎い俊寛め。首取つてはなど歸らざ

るぞ手ぬるしく。地成經康頼も心ゆるさ

れず。汝に預くる連れ歸り。屹度守れ急げ

やつと怒りの顔色。畏つて船押切り、フシ基

康。都へ歸りける。地清盛法皇をはつたと

睨み。潮も逆巻く大聲上げ。地ヤア位ぬけ

殿法皇殿。保元平治より此の方朝敵に惱ま

され。天下暗闇となりたるを悉く切り鎮め。

法皇といはせた入道が恩を忘れしな。動も

すれば平家を威せ入道を殺せななど。俊寛

を始め人を語らひぬつくりとした事たくま

れし。地今迄は常誓といふ女人質に取り置

きたれども。鬮牛若冠者めが奪ひ取り東國へ逃げたれば。一寸も油断ならず此の後平家追討の院宣など。頼朝牛若に地やられては飼犬に手をくはるゝ道理。海へ投込み人知れず殺さんため。嚴島參詣と偽り是迄はつれ來れども。鬮根性腐つても王は王。手にかくるは天の恐れ。地自ら身を投げ給へば清盛に罪はなし。サア身を投げ給へ早う〜と極悪聞くに堪へかねて。磯には千鳥有王丸出るも出られずさし覗き。只はあふ〜と身をひやす。法皇御衣に御涙を掛けながら。天照大神に見放され奉ると思へば。フシ世にも人にも恨なし。地神武の正統八十代自ら身を投げし例を聞かず。入道が心に任すべし。只末代こそ心憂けれとばかりにて昔を慕ひ行末を。忍びかねては明せ返り歎き。沈ませ給ひける。鬮入道が心に任せよとあるからは。殺せとの事な。ヲヲ院宣は背かじと。地勿體なくも取つて引寄せ。兩足かいて眞逆様。フシ海へざつぶと

投込みたり。コハリ汐に引かれて玉體は。沖に誘はれ磯に打ちよせ浮きぬ。沈みぬ漂へば。地千鳥はつと走りいで續いて海に飛入りしが。足立つ程は立ちおよぎお命すくひ奉らん。必ずお身をもむまいとコハリ乗越す汐には拔手を切り。泳ぎのほればさら〜を力にたぐりくる〜漲る波を巴の字に開き。ハヅミ渦巻く。逆巻く波枕。地海に馴れたる海士の業すつと水練に姿も見えず。船には弓鎗太刀長刀。刃をならべ眼を配り浮かば切らんと待ちかくる。陸には有王身をもめども鳥が鷓の眞似せん方なく。拳を握つて控へたり。鬮清盛いらつてヤアうつそりめら陸を見よ。俊寛が下人有王丸。先づ彼奴から打殺せ。地畏つて飛びおり〜命知らずの前髪首。さら、落して根付にせん

と憎體にのさばれば。鬮有王くつ〜と打笑ひ。口有る儘にはざいたり。物ほしい折からよい。地慰みと。面もふらず割つて入り磯打浪のまくり切り。木の葉を誘ふ山おろしもみ立て〜きり散らす地有王に切りまくられ。フシむら〜ばつと逃げ散つたり。地難なく千鳥法皇を肩に引かけ浮み出づれば有王丸。鬮ハア、お命安全めでたし嬉し〜。地こつちへ任せと波打際におり立つて。背中に潮を淨めの垢離。法皇を肩に負ひ奉り。フシ足に任せて落行きける。地其の際に清盛長熊手押取りのべ。千鳥が頭にさつくと打込みえいや。〜と引き汐にさからふ千鳥が浮きくるしみ。舳先にど〜と引上げ背骨を踏まへ。鬮誰に頼まれ憎い海士め。引裂いてくれうか。エ、腹立ちやと胸骨をしつかと踏まへて睨付くれば。オ、踏殺せ喰殺せ。俊寛が養子千鳥といふ薩摩の海士。あづまや様は母様同然。母の敵父の敵の入道。法皇様は一天の君。地お命に代ると思へば數ならぬ。海士の此の世の本望。殺されても魂は死なぬ。一念のほむらとなつて。皮肉に分入り取り殺さいで

置かうか。エ、無念やと怒りの齒ざしみ恨の涙。磯打波に村雨の、フシ篠を亂すが如くなり。肝の太い入道に取りつかんとは。蠶螂が芥鉞よりは是見よと。地さそくに掛けてえい〜。フシ頭微塵に踏碎き。かはと踏み込む波逆巻き。コハリ潮の響き震動し。死したる千鳥が軀より顯れ出づる噴志の業火。清盛の頭の上車輪の如く舞ひくるめく。そつと身震ひ色かはり。ナメスうんと一聲顛倒し、フシ目口をはつて戦きける。地隨身糶色はと驚き抱き起し。薬よ水よと呼び生くれば。すつくと立つて邊を眺め。御女等は何も見ぬか。ヲ、氣味わるしく。法皇も逃げば逃がせ。地命が物種都へ歸らん船念けと。水主擲取玉の汗。海は水玉火の魂は。離れず去らず都の空暮ひ。行くこそ三重へ恐ろしき。地身亡びんとする時は災害ならび臻るとかや。扱も入道相國御心地例ならず。殊更御所中さまの妖怪。或は家鳴光物色々の姿顯れつ。物怪しき事

限りなくいか様變化の業ならんと晝夜をわかつて宿直の武士。そよと物音風音に火鉢の白灰の動くをも。フシ心を配つて守りける。地常に外様の男とは顔見合すも法度に。互に心おおく女中。二十三四の色ざかり町風の是一位。顔も姿も格別に。土器瓶子携出で愛想らしく手をついて。御私は入道様の御臺所二位の尼君様のお使。今日はいつ〜より心を付けてのお宿直。化物も顯れずお心の騒ぎもなく。上にもすや〜お鎮まり一しほ二位様の御満足がり。酒一つめされて。地いよ〜御番油断なき様に申せとの御事なりと述べければ。各はつと頭をさげ。中にも番頭難波の次郎經康。其加にあまる仕合せ御禮は使のお取りなし。ついては外様の我々。御不例の御容體しかと存ぜず。憚りながら御物語りと尋ねれば。さればいな。過ぎつる殿島の御下向より夜晝に四五度つづ。只身が焼けるあた〜とはかり御意なされ。お熱のさす折か

らはあたり四五間の熱さ〜。眞夏の土用に百二百のお釜を。一度に焚く様なと思はんせ。御看病申す私始め一人もお側へは寄付かれず。せめて御心も涼しい様と。御覽なされあの如くお庭に水船を据ゑ。比叡山千手井の水は日本一の冷たい水。毎日日々汲みよせてあの寛から流し込み。すつほりと水に浸り。お頭からさつさと。音羽の瀧にうたる、様になさるれど。その水さへ沸湯の様に成ります。地お熱のささう知らせには此の御所が鳴り渡り。あその隅がめき〜。爰の隅がぐわたく〜。半分開いて一座の者をろり〜とにちり寄り。して其の跡は何と〜。此の跡が猶怖い。かう並んで居る疊の下がむく〜むく。何がお目にかゝるやら。空を睨んで。ヤイ又來たか。地ソリヤ來たわ遣らぬとはがさ〜。通がさぬとてはどた〜。それは〜恐ろしい事と。語れば座中色青ざめ。フシ片息になつて聞きらるる。

地難波の次郎氣磨者。調いやさ變化はけ物は臆病な氣を見すかして業をなす。難波かくて候は、天狗にもせよ鬼でもあれ。障碍思ひもよらぬ事。地あはれ化物かう言ふ内に來れかし取つて捻ぢふせ手取りに致し。樂いらすにさつぱりと御快氣を見せ奉らんと。日に見ぬ先の口廣言。女につこと會釋して。調天狗の鬼のといふ迄なし。誠は我はあづまやとて、地俊寛が妻の幽霊ぞや。サア手取にして見よといふより姿はつと消え。忽ち人の御體座中、フシ一ぱい充ち満ちたり。詞には似ず倒順し。ヤレ恐ろしやなう怖やと駈出す裾を引つ咬へ。追廻し追ひすくめ逃けもやらず居もやらず。念佛陀羅尼お題目一つごつちやに饑饉。上になり下になり轉びあひ轉びのき。火鉢の中へ飛び入りくゞばつと燻ほる煙の内。一塊に山の如く頭一つに目は百千。睨む光りは流星の渦巻きあがる如くにて。わつと戦き肝を消し振けつ轉びつ逃けられば。俄に家鳴り聲

動し、フシ大地も崩るゝばかりなり。地能登守教経筋黄匂ひの腹巻。上には狩衣引違へ重藤の弓張月。星切斑の矢張り矢搔込うで大床に踊出で給へば。女の姿又顯れ。調珍しや教経殿。我あづまやが幽霊なるが御身慕目を以て。我を追退けんと。地弓矢の威光に壓され。情なや入道に近付く事叶はねば。恨みを報ぜん、フシ様もなし。調情ある能登殿に恨みはなし。地弓矢をふせてスエテ歸つてたばせ給へとよ。調何あづまやが幽霊とはことをかし。化損ひの古狸。正體顯せさもなくば能登が一矢と引きしほる。地後に女の又すつくり。我は千鳥といふ女和殿に受けたる恩はなし。歸れといふに歸らずば。入道諸共同じ憂目を三瀬川。來れと誓しつかと取りゑいと引かるゝ梓弓。教経隠せず拂ふ本弮末弮に恐ろしや三十番神ましゝて。魁魁鬼神は穢はしや出でよ。くゝとせめ給ふぞや。腹立ちや思ふ人をば取らで刺へ神々の。責を受くるか口惜しやとスエテか

つばと轉べば大音上げて正四位下能登の守平の朝臣教経と鳴弦し。きりくゝと引きしほりひやうと放つ矢叫びに。二人の女も行方なく。忽ち障碍消え失せて。御所の震動安全たり。地二位殿悦び帳臺を出て給ひ。今に始めぬ教経の弓矢の徳お手柄くゝ。是に付けてもなう過ぎつる夜。地我が見たる夢ばなし能登殿近うと招き寄せ。聲をひそめ目は涙。いふも語るも思はしや。調音に聞く火の車といふ物か。牛の面馬の顔なる鬼どもが。猛火の燃立つ車一領御所の内へやり入る。恐ろしや此の車にいかなる者を乗するぞと夢心に尋ねしに。平家の太政入道殿惡行超過し。閻浮第一の大佛を。焼亡し給ふ科によつて無間地獄へ沈めよと。閻魔王の仰にて迎ひの車と答へしが。地夢は其の儘さめつるぞや。神明の守も絶え三世の佛の綱もきれながき苦患や見給はん今度や娑婆の限りかと。思へば氣も消え入道殿より自らが。命ぞ先へとばかりに

て身を投げ。伏して泣き給ふ。詞教經御手

をはたと打ちあら不思議や。某が夜前の夢。

所は大内の神祇官。東帯正しき人々數多寄

合ひ給ひしが。はるか上座なる老翁。此の

二十四年平家に預けたる將軍の節刀を取り

返し。伊豆の國の流人兵衛佐頼朝に得させ

んずるわと宣へば。一座の各領軍ある。か

たへの人に名を問へば上座は八幡大菩薩。

地斯く申すは武内の神なりと。いひもあへ

ず霧霞と影消えたり。御夢といひ我が見る

夢かたぐ御慎み。家門の大事と宜ふ所へ。

詞信濃の國の藏人庭上に畏り。地故帶刀先

生が次男。木曾の冠者義仲義兵を起し。其

の勢既に雲霞の如く安曇の城に立籠り。又

東國には流人兵衛の佐頼朝院宣を申し下

し。北條の四郎を語りひ。山木の判官を夜

討にし石橋山に城廓を構へ。ゆゑしき御大

事に候といまだ訴へ終らぬ所へ。筑紫宇佐

の大官司公通。慌しく罷出で。鎮西の住人

緒方の三郎維義。平家を背き彼に従ふ戸次

白杵松浦黨。皆々源氏に心を寄せ伊豫の國

には河野の四郎。紀州に熊野の別當。温増

鈴木を語りひ源氏に従ひ。平家に弓を引か

んとす。早く討手を遣はされ然るべからん

と言上す。地二位殿を始とし人々耳を驚か

し。ッあきれ果てたるばかりなり。詞教經

眉に皺をよせ。東國北國の背く上。南海西

海悉く敵となり。地念なる事眉に火のつく

同然。病氣のさはり入道殿へは沙汰御無用。

宗盛公へ參上し一門集め。追手の手分致さ

んといひ捨て。ッ御所を退出ある。詞信濃

の藏人大官司公通つつ立ちあがり。知らず

や我こそあづまや千鳥二人が亡魂。情なや

清盛に命を取られし恨の魂魄。憂き目を見

せんと思ひしに教經が弓勢。かりに姿を變

化してたばかりで斯く退けたり。地今こそ

思ひ知らせんと二人の姿消ゆるとひとし

く。コッ噴き無明の二つの烟。ひらめき轟

き入道の。ナホスふしどに飛んで入ると見

えし。はつとばかりに女房達二位殿を介

抱し。ッはふく逃け入り給ひける。地障

子蹴破り太政入道。なう熱や情なや五臟六

腑焼きこがす。ヤレ骨を焚くわ身を燃すわ

堪へがたやあら熱やと。天をつかみ地をつ

かみ。苦しや助けよと吐く息も猛火に。な

つて却つて身をこそッ焼きにける。地多

くの女中次の間に。熱さは共に身を焼く如

く。傍あたりへは寄付かれず。入道息も綱

えんぐに。水よくと呼ばはれば。そりや

こそと女房達。用意の笥に仕掛けたる千手

の水を手ん手に汲み。流せば笥に傳ふ水音

も。左右に分れてさつ々さ。さ々れ石船

さ々波立ちオクリ水どうへくと。ッ港へた

り。地心よけに入道飛びいらんとしたりし

が。眼に物や見えつらん。枕の小太刀おつ

取り虚空を睨み大音上げ。詞珍しや頼朝。

命を助け置きたる昔を忘れ。平家に弓を引

かんとは思を知らぬ大悪人。おのれは牛若

小冠者めな。鞍馬育ちの精進腹入道を討た

んとや。地年こそ寄つたれ手なみを見よと

へ思ひ知られたり。今こそ本望達けたりと虚空に上る二つの玉。邪見の長柄を押立てて立去る車の響きに驚き。二位殿あわて出で給ひ。見れば敢なき面影のいぶせくも悲しくも。空を仰ぎてわつとばかり歎き。沈ませ給ひける。人々立寄り諫め参らせ奥にいざなひ奉り。清盛の御骸を津の國兵庫の名にし負ふ。經が島にぞ納めける天子の外祖とかしづかれ。此の世に極る位をふみ六十餘州に威をふるひ。古今獨歩の人なれども。又かへり來ぬ死出の山三途の河瀬中有の旅。つくりし罪より友もなき妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者の。佛の金言目のあたり。身の毛も立つて世の人の永き。教へとなりにける。

第五

次第思ひやるさへ遙かなる。東の旅に急がん。是は高雄の文覺なり我伊豆の國の流人。右兵衛佐頼朝をすゝめ。平家追討の義兵を起させばやと思ひ。ひそかに院宣

を申し下し。只今伊豆の國蛭が小島へと急ぎ候。ナホス、ア、づなう草臥れた。意地にも我にも百里足らず。二日にはきついで道。とろくくと見知らして又一息にやつてのけよ。さらばころりと臥柴の。枕にかりの頭陀袋。寝るより早く高軒。フシ地雷かと疑はる。地時に文覺假寝の魂。コハリ忽ち體を顯れ出で。今目前にありくと亡ぶる平家の有様を。ナホス、夢ともわかす現ともいさ白旗を。三重へひるがへす。地扱も兵衛佐頼朝公。關八州を切り從へ。其の勢既に十萬餘騎御舍弟九郎御曹司義經。秀衡が勢を驅催し。奥より切つて伊豆の國。心も勇み浮島が。フシはらから御陣をめされける。地時に文覺法衣を改め。二人の中に立ちはながり。和殿は聞きおよぶ牛若丸な。今元服して義經とは。テ、眼の内の賢しき生れ。久々にて全兄頼朝に對面嘸満足。先達て頼朝には平家追討の院宣申し下して参らせつ。和殿にも見参の引出物致さう。是は故左馬頭義朝の體。二度の朝敵と六條河原に曝せしを。奪ひとつて肌を放さず。頂戴あれと前に置き。地念珠つまぐり座をくめば。兄弟床几をまろび下り。中にも義經。調ヲ、情なや口惜しや。運を計り時節を待つとは云ひながら。早速御敵清盛を討ちもせず。一度さへあるに二度獄門の末に曝させ。地御名を汚せし不孝の恐れ。早く平家の一門が首取つて大路にさらし。父上の修羅の妄執。今生の仇を報じたやと踊上つて怒りの涙。頼朝は默然といはで歎きも一入に。二人の心思ひやり。伺候の軍兵目を見合せ。シ皆哀れをぞ催しける。地かゝる所へ有王丸大汗になつて馳付け。調俊寛が郎等有王と申す者。君しろし召さずや。木曾の冠者義仲。北陸道より討つて上り。一戦にも及ばず平家は悉く西海へ逃けくたる。地法皇のまします籠の御所に亂れ入り。是をも一所に西海へ連れ参らせんと計りしを。有王やうくに盗み出し。法皇は當國三島の

明神迄供奉仕り。某一人訴のため參上とッ
シ大息ついで述べければ。頼朝甚だ驚き給
ひ早速の注進過分々々。同じ源氏の一類な
れども義仲に平家を討たせては頼朝が末代
の恥辱通れがたし。我は右王を召具し法皇
の迎のため。三島へ馬を馳すべきぞ。我
が代官として義經六萬騎の勢を引率し。夜

を日に繼いで都にのほり。平家の一門根
をたつて早く凱陣あるべしと。たえて久し
き白旗を。雪井の外迄なびかせて出陣。あ
るこそ 三三、ゆ、しけれ。フシ然るに平家。
榮華を極め暴悪を。恣ま、にせし其の天罰。
めぐつて木曾の義仲に馴れし都を追出さ
れ。落ちて行方も赤間が關安徳天皇を始め
奉り。女院二位殿一門以下皆入水と聞えし
かば。コハリすは勝軍と源氏の武士船よりつ
くる関の聲。水のしら玉たまの緒も。共に
消えゆくナホス船軍今日を限りと見えにけ
る。能登守教經端舟に取り乗り。義經に
見參と心を配つて漕廻る。源氏の方より

安藝の太郎實光。同じく次郎光行と名乗つ
て教經の舟に漕並べ。手取りにせんとしつ
かと組む。教經怒つて左右に二人を取つて
引きしめ。コハリいさうれおのれら能登が最
期の供せよと。うんと締むる小腕を取り放
れん。放さじ退かう退かさじゐいやく。
と組合ふ番舟を踏みしめ踏みはなし。逆巻
く波はとうくく。三人一所に海中へど
うと落ちたる水の泡。消ゆるとひとしく海
の面。ナホス忽ちもとの字津の山磯打つ波と
聞えしは。草の葉渡る風の音。義朝の頭枕
の上眠りの。夢は覺めにけり。地文覺むつ
くと起き上りあたりを見廻し。ムム、聞え
たく。邯鄲の枕に五十年の夢を見し。そ
れは唐土是は又。義朝が髑髏を枕にしたる
一睡に。平家の滅亡源氏の榮を見たる事。

夢にあらず現にあらず正八幡の告ぞかしッ
頼もしし頼みあり。地見よく。平家に泡ふ
かせ。源氏一統の御代となし。天下泰平國
繁昌五穀成就民安全。めでたい盡めにし

見せんと。袋おつ取り首にかけ勇み勇んで
急ぎける。百億萬歳末かけて楫がず。動かす
傾かぬ源氏の御代の腰押は。六神通の文覺
か。從ひ守る神と君久しき。國こそ樂しけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有
といへ共又うつしなる故節章の長短墨譜
の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫
烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし
全く予が直之正本にあらず故に今此本
は山本九右衛門治重新に七行大字の板を
彫て直の正本のしるしを糺せよとの求に
したがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾

(印取) 教博

正本屋 山本九兵衛版

大阪高麗橋登丁目

山本九右衛門版圖